2023年6月11日　主日礼拝　あけぼの創立74周年感謝礼拝

説教題「わたしは良い羊飼いである」ヨハネによる福音書10章7～21節

主任牧師　加藤　誠

「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネ10章11節)

あけぼの幼稚園は74年前の今日、1949年6月11日に設置認可を受けて、宗教法人大井バプテスト教会附属幼稚園として誕生しました。以来、74年間で4531名の卒業生があけぼのを巣立っていきました。少子化の中で毎年定員を超える入園希望者を神さまが送ってくださっていることは大きな驚きであり感謝です。昔、あけぼのを卒業された方たちが、自分のお子さん、そしてお孫さんを「あけぼの幼稚園に」と送り出してくださいます。ありがたいことです。これまでの長い歴史の中で地域の方々とそのような信頼関係を積み重ねてこられた幼稚園の先達の教職員の方々、そして教会の祈りによる支えに深く感謝を覚えています。

もっとも「園児の定員が満たされる」ことは大切な願いでありつつも、いつ、どの時代においても第一に心砕くべきことは、あけぼの幼稚園の創立に込められた教会の祈りを大切に覚え続けることです。「戦後、荒廃した大井町の一角に、しののめを呼び覚ますように神はこの幼稚園を設立された。私たちはこれを『あけぼの幼稚園』と命名した」と教会の五十年史に記されています。「教会はあの愚かな戦争を止めることができなかった反省に立ち、聖書による人格教育が必要である」という教会の熱い祈りがそこにありました。「しののめを呼び覚ますあけぼの」は、暗闇の中に新しい朝の到来を告げるイエス・キリストの光を意味します。「光は闇の中に輝いている。闇はこれに勝たなかった」（ヨハネ１：５口語訳）とヨハネ福音書が告白している「キリストの光」です。「あけぼの」幼稚園は、戦争の暗闇の時代を生き抜いた人びとの心に、キリストの平和の光を照らし出す教会附属幼稚園として創立されたことを常に覚え続けていきたいのです。

あけぼの幼稚園は「何に」根ざし、「何に」仕える幼稚園なのか。わたしは次のように理解しています。「神の愛に根ざし、キリストの平和に仕え、子どもたちと保護者と共に、日々御言葉において成長する。」

あけぼの幼稚園ではじめてキリスト教保育を知った若い教師が「聖書を通して、はじめて『隣人』という言葉の意味を知った」と言っていたのが印象に残っています。「隣人」という言葉は公立の幼稚園ではまず耳にすることがありません。けれども「隣人」は聖書の大切なキーワードです。「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」という主イエスの御言葉を巡って、ある牧師がこんな意味のことを語っていました。「韓国で『君は愛されるために生まれた』という歌がはやった。確かにそうだ。けれど『愛されるため』で終わっていいのか？教会学校の子どもたちとこの歌の２番を作った。『君は愛するために生まれた』と。キリスト教は自分を救うための信仰ではない。キリストが私たちの救いのために御自身をささげてくださったゆえに、私たちが自分の救いのためにしなければならなことはもう残って

いない。私たちがキリストから招かれているのは隣人を愛すること。ただ、その「愛する」とはほんとうに難しい。だれかを愛そうとすると愛の足りない自分を知らされて落ち込み、相手から傷つけられることも起こる。その葛藤を抱えながら歩む力を聖書は与えてくれる…」と。キリスト教の信仰は「自分が幸せになるための信仰」ではなく、「誰かと一緒に幸せを分かち合い、暗闇あふれる世界の中で希望を一緒に見つけていくための信仰」なのです。その意味であけぼの幼稚園は「キリストの平和に仕える」ことを祈り続ける教会附属幼稚園でありたいと願います。

今朝はヨハネ福音書 10 章の「わたしは門である」「わたしは良い羊飼いである」という主イエスの言葉を聴きました。当時、羊は石造りの囲いの中で猛獣たちから守られて休みました。毎日、羊飼いが出入りする門を通り、羊たちを牧草や水飲み場に導いてくれるのです。同じように、私たちは羊飼いなしに日々の命を生きることが出来ません。良い羊飼いであるイエス・キリストだけが、私たちを神さまのもとにある霊的な食べ物（安らぎ、勇気、優しさ、希望など）に導いてくださいます。良い羊飼いからいただく最も大切な霊的な食べ物は神の愛です。神の愛を知り、神の愛に結びつけられていくとき、私たちは生きる力をいただくのです。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」。その最も大切な神の愛を与えるために、主イエスは十字架に御自身をささげられました。

あけぼの幼稚園も、この良い羊飼いである主イエスの導きを離れては成り立ちません。例えば毎朝の職員礼拝はあけぼの幼稚園の命です。子どもたちと向かい合う保育の現場は、毎日試行錯誤と葛藤の連続。「愛する」といっても、子どもたち一人ひとりは違うので答えは一つではありません。教師自身が問われ、失敗もするし、自信をなくして落ち込むこともしばしばです。その時に毎朝の礼拝がどれだけ力になっているか。同僚の教師たちが分けてくれる御言葉や祈りの言葉に励まされて、毎日キリストにつなげられ、毎朝信仰をいただき直していく…の繰り返しです。

クリスチャンになれば善人に変われるのか。なれません。相変わらず罪人です。けれども罪人であるわたしをどこまでも愛し、一緒に歩んでくださる良い羊飼いを知っているゆえに、「赦された罪人」として生きるのがクリスチャンです。そして日々御言葉を求め、神と隣人と共に生きる力を祈り求めながら歩むのです。

今朝のヨハネ 10 章のイエス・キリストの言葉を聞いた多くのユダヤ人は「この男は気が狂っている。悪霊に取りつかれている！」と激しい非難を浴びせました。かつて日本が戦争に突き進んだ時代、敵性宗教の「聖書」でお国のために戦う兵隊を教育できるのかと、激しい非難がキリスト教に向けられました。いつ戦争が起こるか分からない時代を私たちは歩んでいます。時代を覆う「空気」というものは一晩で一変します。人びとが「これこそ正義だ！」と叫びだし、少しでも異論を語ろうものなら総攻撃を始めるのです。そのとき、私たちは誰の声を聴く者として歩むのでしょうか。人びとの声が小さくなるほどに、良き羊飼いであるイエス・キリストの声をしっかりと大きく聴いていく信仰をいただいていきたいのです。